

楯築遺跡(国指定史跡) 所在地=倉敷市矢部

吉備津神社のある吉備の中山の真西、聖なる磐座(いわくら)のある日差山との中間に、楯築の丘西山があります。この丘陵一帯には、巨石を含む磐座を始め白鳳時代の古い寺跡(氏寺)があり、王墓山公園として整備されています。麓には足守川が流れ、すぐ南にRSKのバラ園で親しまれている遊園地がありますが、弥生末期には瀬戸の穴海の海岸線で、当時の港湾施設もありました。伝承では温羅退治に吉備津彦が立石を楯にしたと言われ、鯉喰神社(弥生墳丘墓)も近くにあります。

戦後岡山大学の考古学者近藤義郎(1925～2009)教授の発掘(1976～1989)が7次13年に亘って行われ画期的な大発見になりました。この遺跡は弥生末期のお墓で、後続の古墳と区別して「墳丘墓」といい当時日本列島最大のお墓で、中央が円丘で両サイドに突出部を持ち、正式調査をしないまま破壊されたため、推定総長100mと公表されています。墳丘上には5個の巨石が東西南北と中央に立石し、ストーンサークルの状態です。円丘と突出部には、第1列石と第2列に板状の大きな石を配し、中に少し小さい石を並べていたのです。後の古墳の埴輪列のようにも見えます。両サイドの突出部の片方を取り除くと前方後円墳に近いものになります。

中央部の埋葬施設は「木槨・木棺」で、中国の漢時代楽浪郡のお墓に通じ、道教の影響を受けたとも取れる丁寧な仕上げがしてありました。床には厚さ3～5cmの中国製水銀朱が敷き詰めてあり、その量は32kgもありました。当時列島の出土の全てより多い量でした。中国でも不老長寿の薬として貴重品がこの楯築の丘でこれだけ多く出土したことは大変意味のあることです。

そして最も大切なのは、吉備特有の特殊器台と特殊壺によって祭祀が行われていたことです。この土器は埋葬用ではなく祭祀用具であることに意味があります。高さが1m前後で肉厚は薄く持ち運べる代物ではありません。その特殊器台が出雲や畿内でも出土しています。吉備人が移動してそこで吉備式祭祀を執り行ったことでしょう。特に年代の近い箸墓古墳では特殊器台が埴輪に移行する前後の遺物が出ているのです。

近藤教授の友人で郷土史家の薬師寺慎一氏は、楯築遺跡は単に埋葬施設だけでなく弥生末期日本列島最大の墳丘墓(近藤説)で、中国の道教=鬼道を用いた祭祀の跡が木棺の床に敷き締められた水銀朱であり、頂上部に現存する巨大な立石は東に見える吉備の中山から西の日差山を太陽が通る道と考え北の龍王山、南の常山が磐座で、中央の石を神の依り代とする道教の「神仙の住む五嶽」を示すと説を発展させています。収納施設に安置されている御体石=弧帯文石(通称亀石)の様子は龍神(水を呼ぶ神)を模したもので吉備に多く現れるものであり、卑弥呼が鬼道を用いて祭祀した列島最初の地がこの楯築の丘であると主張されています。この説だと魏志倭人伝の邪馬台国は吉備になり、女王卑弥呼がこの楯築で道教の鬼道で祭祀していたことになり、夢は限りなく拡がってまいります。我が郷土にはこのような説もあることを敢えてお伝えしておきます。当日は出土した実物の水銀朱や収納施設を開放していただき直接亀石も見せて頂きます。

国立歴史民俗博物館の春成秀爾名誉教授は本年6月18日のおかやま歴史塾の講演で、特殊器台・円筒埴輪・弧帯文石などが箸墓古墳との関連で「卑弥呼が吉備一族の出身であることを物語っている」と結論された。(文責 山崎泰二)

(全国歴史研究会第27回全国大会吉備の国岡山大会「大会資料集」より抜粋)